

經濟論叢

第141卷 第6号

平井俊彦教授記念號

献 辭	尾 崎 芳 治	
世論の觀念について	阪 上 孝	1
J. S. Mill が社会科学研究の 始源においたもの	山 辺 知 紀	19
資本制商品の物神性の根拠について	梅 沢 直 樹	43
レーニンの市場理論について	太 田 仁 樹	62
ジョン・ミラーとフランス革命	田 中 秀 夫	81
社会主義者の社会ダーウィニ主義観	保 住 敏 彦	100
ニューディールと民衆・序論	小 林 清 一	119
フランス・プロテスタント封じ込め政策 (1610-1661)	木 崎 喜代治	138

平井俊彦 教授 略歴・著作目録

昭和63年6月

京都大學經濟學會

社会主義者の社会ダーウィン主義観

——第二インターの場合——

保 住 敏 彦

I は じ め に

第二インターの社会主義とりわけドイツ社会民主主義の思想については、これまでその政策論や社会運動論にかんする研究はなされてきたが、その歴史観や社会観などの基礎的な思想について内在的に研究し、あわせて当時の思想状況との関連やドイツ社会のなかでのかれらの思想の位置や役割について解明する作業は、すくなくともおぼろげである。わたしは以前、1890年頃から1940年頃までのドイツの社会主義者の唯物史観解釈の変遷について論じる機会があった¹⁾が、このたびは、第一次大戦前のかれらのダーウィン主義および社会ダーウィン主義にたいする見解を検討し、かれらの歴史観・社会観の特徴のいくつかを明らかにしたいとおもう。

周知のように、マルクスはフォイエルバッハと青年ヘーゲル派を主たる論敵として批判しながら唯物史観を形成したのにたいして、第二インターのマルクス主義者たちは、ダーウィン主義の影響のもとにマルクス主義を解釈するか、または社会ダーウィン主義からの社会主義批判と関わらざるをえなかった。このことは、ドイツ社会民主党の代表的理論機関誌『ノイエ・ツァイト』(1883-1923)のなかで、ヘーゲルまたは弁証法について論じた論文はきわめてすくないのにたいして、ダーウィンとダーウィン主義、ダーウィン主義と社会主義などの関係にかんする論文が十数篇みられることにも、示されている。19世紀後葉から20世紀前葉の重要な思潮であり社会運動にも強い影響をおよぼした社会

1) 拙稿、ドイツ社会主義における唯物史観の問題、「甲南経済学論集」27巻4号、昭和62年3月。

ダーウィン主義にたいするドイツの社会主義者の見解を検討することにより、ドイツ社会民主主義の思想の特徴と限界が浮き彫りにされるだろう。ところでここでダーウィン主義というのは、諸個体の生存競争による最適者の生存（自然淘汰）が種の進化をもたらすとするダーウィンの進化論のことであり、社会ダーウィン主義とはこれを社会現象に適用した社会進化論のことである。

II 19世紀後葉の西欧の社会と思潮における社会ダーウィン主義の位置

（1）19世紀後葉の社会と思潮

1871年のドイツ帝国の成立以来、ドイツの工業化はいちじるしく進展した。いわゆる泡沫会社創設時代といわれる会社設立の波が高揚し、つづく不況期のなかで企業の合併がなされ、1890年代には独占的企業家団体が設立されるにいたる。この時期にドイツは、炭鉱業、製鉄業、化学工業、電気工業などにおいて、イギリスを凌ぐような発展を遂げた。19世紀中葉までのイギリス中心の世界経済体制から、19世紀後葉から20世紀前葉にはイギリス、ドイツ、アメリカ合衆国、フランス、ロシア、日本などのいくつかの経済的中軸をもつ世界経済体制に移ってゆく。とどうじに、先進工業国の国内経済は独占体制に、世界経済は帝国主義的支配・従属の体制に移ってゆく。

こうした19世紀後葉から20世紀初頭のヨーロッパの社会経済情勢の特徴は、科学技術の革新にともなう工業生産力の飛躍的発展、資本の集中と独占的資本組織の成立、労働者層の増大と労働運動や社会主義運動の進展などである。イギリス以外の国々においても産業の急速な発展がみられ、産業組織も競争的組織から独占的組織への変遷がみられた。どうじに、国内的には産業近代化にともなう社会問題の発生とそれをめぐる階級闘争の発生と資本のがわからの社会政策の展開がみられた。他方、それぞれの先進工業国は保護関税・資本輸出・植民地政策などの政策を採用して経済的権益を確保しようとするので、国際的には諸工業国の間の帝国主義的な対立が生じるようになった。

1870年頃には、ドイツ、イタリアなどの中欧における国民国家も成立し、多

民族国家オーストリア・ハンガリー帝国の民族問題をのぞけば、民族問題も解決され、民族国家を単位とした国際政治が展開されるようになった。こうして、国際的には諸民族国家間の対立抗争があらわになり、国内では階級闘争の激化と国家の手による社会政策の展開が見られるにいった。さらに、思想状況を見ると、生産力発展と結びついて自然科学や技術が発展する一方で、コントのような実証主義的な社会学や新カント主義哲学が流行し、歴史主義的な経済学や社会政策論がだされた。イギリスでは功利主義思想とならんでダーウィンの進化論が普及する。マルクスの社会主義論も、ドイツを中心に知識人や指導的な労働者層に浸透してゆく。ダーウィンの進化論とマルクスの社会主義はともに、キリスト教的文化や伝統的な社会的価値を批判するものとして、普及していったのである。

こうして19世紀後葉には、経済、政治、思想のどの局面においても、18世紀以来の伝統的な啓蒙主義的世界観では、説明のつかない現象が優勢になってきた。トレルチの言うように、18世紀が個人主義を特徴としていたのにたいして、19世紀は「社会的結合と大衆の集団化」を特徴とする文化にかかわったのであり、このため、社会思想も集団と集団、階級と階級、民族と民族などの関係をテーマにするものになった。18世紀までの啓蒙主義にくらべて、歴史主義、初期社会主義、マルクス主義、ダーウィン主義などが、流布してくるのもそうした事情による。これに対応して、19世紀の啓蒙主義も、このダーウィン主義と社会ダーウィン主義的な社会学の影響により、その体系から目的論を排除することに成功したのであり、また社会学の成果を学んで、進歩の信仰を個人の理性によってではなく、発展と適応の法則によって基礎づけようとするにいたる²⁾。

このように、19世紀の社会の変貌と文化や思潮の変化のなかで、ダーウィン主義のしめる位置は大きかった。功利主義とダーウィン主義とは、19世紀後葉のブルジョワ思想の重要な要素をなしていたのであり、したがって社会主義にたいしても影響を及ぼしたのであった。そこでつぎに、ダーウィン主義とりわ

2) トレルチ、『トレルチ著作集10』ヨルダン社、204頁参照。

け社会ダーウィン主義が、帝国主義政策をはじめとうじの社会にどのような影響を及ぼしたかを明らかにしよう。

(2) 社会ダーウィン主義と帝国主義

ダーウィンの進化論を社会に適用して、諸個人の間の、ないしは諸集団の間の競争による最適者の生存をつうじて、社会の進化がなされるとみるのが、社会ダーウィン主義である。社会ダーウィン主義の帝国主義思想への影響を論じた H. W. コッホは、「社会ダーウィン主義は、階級、民族、人種であれ、経済的利害集団であれ、何らかの利害のために、無慈悲で非妥協な闘争を説くすべての人々の、効果的な道具になったのだ」³⁾ とのべている。そうしたものとして社会ダーウィン主義は帝国主義を精神的に支持するイデオロギーの機能を果たしたのであった。

ところで、社会ダーウィン主義がそのように流布するにいたった原因は、ひとつには19世紀後葉の西欧社会が、諸個人の間の、諸社会集団の間の、また諸国家の間の競争が激化した時代だったこともあるが、それにもましてこの時代が工業や技術の発展が急速で、社会の進歩が信じられた時代だったことがあるだろう。センメルによれば、「1870年代中葉のドイツ帝国では進化ということが主要な論争課題であった」⁴⁾。ドイツ帝国成立以来の急速な工業化と社会の各領域での近代化という状況が、このことの背後にあったとおもわれる。1875年にドイツ社会民主党も、「進歩の党」を自称しており、進歩というものが当時のもっとも流布したスローガンであった。

社会ダーウィン主義者として著名な論客には、イギリスでは、ハーバード・スペンサーやのちにはベンジャミン・キッドとカール・ピアソン、ドイツ、オーストリアではルードヴィッヒ・グンプロヴィッツ、グスタフ・ラッツェンホーファー、ヒューストン・スチュアート・チェンバリンなどがある。これらの

3) Hansjoachim W. Koch, *Der Sozialdarwinismus. Seine Genese und seine Einfluss auf das imperialistische Denken*, Verlag C. H. Beck. München, 1973, S. 6.

4) R. センメル著／野口建彦・野口照子訳『社会帝国主義史』みすず書房, 1982, 30頁。

ひとびとのなかには、自由主義と個人主義を信じるスペンサーのようなものもいたが、おおくはピアソンやチェンバリンのようにのちに帝国主義を社会ダーウィン主義でもって基礎づけたひとびとであった。

H. W. コッホによれば、社会ダーウィン主義はスペンサーの社会哲学とダーウィンの生物学との総合から成立した。それは生物界における生存競争と自然淘汰による最適者の生存という原理を、人間社会に適用して、人間社会における諸社会集団の間の闘争を、また諸個人間の闘争を肯定するイデオロギーをつくりあげた。ところで社会ダーウィン主義の立場からの社会解釈には、保守主義的なタイプと改良主義的なタイプとのふたつがあるという。社会ダーウィン主義は、膨張主義的な帝国主義のイデオロギーにもなり、社会批判的社会改良的な見解とも結びつくのである。そして、イギリスでは前者の傾向がつよく、アメリカでは後者の傾向が強かったという。

イギリスやドイツでは、社会ダーウィン主義は帝国主義、戦争の賛美、人種主義などとむすびつく傾向がつよかった。まず、帝国主義との結びつきだが、帝国主義は利害集団によってだけでなく、民族がその推進勢力に組み込まれるので、優秀な民族の劣等な民族にたいする支配の権利という主張がなされるようになり、そのため社会ダーウィン主義の主張が利用されるようになる。たとえば、T. H. ハックスレーは、「帝国主義的立場からはよりおおきく強い民族が、より弱小な民族を排除したり吸収する権利をもっているという結論にたっした」(Ebenda, S. 92)。また、B. キッドは、その著『社会進化論』(ロンドン, 1894)のなかで、「イギリスの侵略と大英帝国の存続と拡大を正当化するような、倫理的、宗教的、社会的論拠を述べたとき、普遍的文明の利害のもとに書いていると確信していた」(Ebenda.)。19世紀末には、ボーア戦争の際のイギリスの人種理論をもちいた正当性の主張に見られるように、すでに社会ダーウィン主義による帝国主義の合理化が見られた。また、1900年代の英・独建艦競争の際に、英・独両国においておなじように社会ダーウィン主義的なアジェーションがなされたという。

また社会ダーウィン主義と戦争の賛美との結びつきは、イギリスの戦争文学者たちの作品や、1880-1914年のころのドイツの通俗的な新聞・雑誌のなかに、みられるという。たとえば A. C. イェイトは、「ボーア戦争を例にとりつつ、戦争がどのように有利な結果を、イギリスの生活領域に及ぼしたか、示そうとこころみた」(Ebenda, S. 107) のであり、L. ウォールズリーは、「人種および民族の誇りの重要性を強調した」(Ebenda, S. 108) のであり、T. M. マグッアイアーは『ナショナル・レビュー』(1898年) のなかで、「戦争は、恐ろしいものであるが、崇高なものでもありうる」(Ebenda, S. 111) と述べたのである。

さらに、社会ダーウィン主義と人種主義との結びつきについてはどうか。両者の結びつきは、ナチズムにおいてもっとも極端なかたちで現れていた。アーリア民族によるユダヤ民族の絶滅を合理化する論拠は、社会ダーウィン主義によって与えられたのであった。ところが、生物界における生存闘争と自然淘汰による最適者の選抜というダーウィンの思想が、科学的真理として認められるだけでなく、その人間社会への適用としての社会ダーウィン主義もまた科学的真理と認められるにいたるならば、社会ダーウィン主義による人種差別や民族抑圧の根拠づけも、正当なものとみられるようになるだろう。こうして、帝国主義からナチズムにいたる支配階級のイデオロギーにたいして、社会ダーウィン主義は重要な論拠を提供したのであるが、これにたいするドイツ社会民主主義の理論家たちの評価と対応はどうだったのか。この問題にはいるまえに、まずかれらに強い影響をおよぼした、マルクスとエンゲルスのダーウィン主義観をみよう。

III マルクス、エンゲルスのダーウィン主義観

(1) マルクスの見解

マルクスは1873年に、ダーウィンにドイツ語版第二版の『資本論』を献呈し、その献辞に「チャールズ・ダーウィン氏へ／その真正の賛美者より、カール・

マルクス……」と記した。このことに示されるように、たしかにマルクスは科学者ダーウィンにたいして、尊敬の念を抱いていたが、それはダーウィン主義がキリスト教の教義や伝統社会の価値にたいする批判を内包しているという理由からであって、ダーウィン主義がかれの社会観・歴史観の成立に影響を及ぼしたとか、その不可欠の構成要素だという理由からではなかった。というのも、ダーウィンの主著『種の起源』は、くしくもマルクスの『経済学批判』とおなじく、1859年に刊行されたのであり、マルクスはすでにこの年までに自らの社会観・歴史観の基本構造を確立していたと見られるからである。ちなみに、マルクスの唯物史観のもっとも早い時期の表明は、『ドイツ・イデオロギー』（1846年）のフォイエルバッハにかんする一章にみられ、その完成した定式は『経済学批判』（1859年）の「序言」にみられる。したがって、マルクス主義とダーウィン主義は独立して形成されたのであり、当初は互いに影響しあうこともなかったといえる。

では、マルクス自身のダーウィンにたいする評価は、どうだろうか。最近のある研究論文によれば、「マルクスは最初は、それが超自然的現象を自然科学から取り除き、『階級闘争のための自然科学上の基礎』として役立つという理由から、『種の起源』に熱狂したが、すぐに、ダーウィン主義を、資本主義社会におけるブルジョアの競争の闘いを反映するブルジョア・イデオロギーとみなすにいたったのである」⁵⁾。

マルクスのダーウィン主義にたいする評価は、アンビヴァレントなものであり、一方ではそれが生物界にかんする科学的真理であるとみるが、他方ではそれがイギリスの競争社会を反映したブルジョワ・イデオロギーであるとみていた。たとえばマルクスは、1861年1月16日づけのラサールあての手紙のなかで「あらゆる欠陥にもかかわらず、ここで（ダーウィンの著作で——引用者）はじめて、自然科学のなかの『目的論』が、致命的な打撃をうけただけでなく、

5) Ralpf Colp, JR., "The myth of the Darwin-Marx letter", in; *History of Political Economy*, 14: 4, 1982, p. 461.

その合理的な意義も経験的に分析されたのだ」と述べ、ダーウィンの学説の自然科学上の功績を認めている。しかしマルクスはまた、1862年6月18日づけのエンゲルスあての手紙のなかで、「ダーウィンは動物や植物のなかに、分業、競争、新市場の開発、発明およびマルサスの『生存闘争』などをともなう、イギリス社会を認めている」と述べ、ダーウィニズムが、イギリス社会の特徴を生物界にも認める、きわめてイデオロギー的な理論だとみたのである。

(2) エンゲルスの見解

テレル・カーバー氏によると、「エンゲルスは論文『猿の人間への変化における労働のはたす役割』のなかで、マルクスの理論とダーウィンの理論とを統合しようとし、人類史の最初の発展がおもに人間労働の性格にもとづいていたが、結局は、自然淘汰は技芸の継承という非ダーウィニズム的な理論にとつてかわるとみたのであり、したがって「エンゲルスは事実上、人類史における最適者の生き残りという社会ダーウィニズム理論を採用したのではなく、『全人類史』は『階級闘争、搾取者と非搾取者、支配者と非抑圧者との間の競争』（1888年『共産党宣言』序文）の歴史だというマルクス主義理論を受け入れたのである」⁶⁾。

たしかに、カーバー氏のいうように、エンゲルスを社会ダーウィニズム者だと評価することはできない。たとえば、エンゲルスは1875年11月12(-17)日づけのラブラフあての手紙のなかで、「人類社会と動物社会との間の本質的差異は、動物はせいぜい拾集するだけなのに、人間は生産する、ということです。このただひとつの、とはいえ重大な差異だけからみても、動物社会の法則をそのまま人類社会にうつすことは不可能です」と述べ、ホップズやマルサスの理論を生物界にうつしかえたダーウィン学説の限界を指摘している。しかし、エンゲルスはマルクスよりは、ダーウィンの進化論とマルクスの階級闘争論とを統合しようと努力したようにみうけられる。というのも、エンゲルスのマルク

6) *A Dictionary of Marxist Thought*, Edited by Tom Bottomore, Basil Blackwell Publisher Limited, 1983, Vol. 1, p. 113.

ス主義解釈におけるきわめて実証科学的な傾向や、政治思想における漸進主義などに、ダーウィン主義からの影響が認められるからである。

たとえば、エンゲルスは1873年にマルクスが死去した際、ハイゲート墓地での葬送の辞のなかで、マルクスをダーウィンと比較し、「ダーウィンが生物界における進化の法則を発見したように、マルクスは人類史における進化の法則を発見した」と述べ、マルクスとダーウィンのあいだに類似性があるとみなす見解を表明した。それは、その場に何人かのイギリス人のダーウィン主義者が参列したという外的な事情のせいばかりではなかった。マルクス主義を人類社会の発展法則を解明した科学とみなす、エンゲルス自身のマルクス主義解釈にも由来する見解だった。ちなみに、エンゲルスは『アンチ・デューリング論』や『自然弁証法』や『家族・私有財産および国家の起源』のなかで、かれのマルクス主義解釈とその敷衍を行った際に、社会発展の法則を強調する立場を取ったのであった。

(3) エドワード・アーヴェリンクの見解

ところで、マルクス、エンゲルスのダーウィン主義評価と、ドイツ社会主義者の理論家たちのダーウィン主義評価とをむすぶ結節点をなすのが、マルクスの女婿エドワード・アーヴェリンクの見解だった。アーヴェリンクは、『ノイエ・ツァイト』誌に「チャールズ・ダーウィンとカール・マルクス」⁷⁾ という論文を寄せている。これは同誌においてダーウィンを論じたもののうち最初期のものである。そのなかでアーヴェリンクは、ダーウィン主義とマルクス主義とが、矛盾しておらず、むしろ前者は後者を基礎づけていると見ている。すなわち

「おおくのわれわれの敵の見解によれば、ダーウィンの理論とマルクスの理論とは互に対立している。とりわけ自然淘汰の理論は社会主義の見解とはきわめて鋭く対立していると、ひとびとは主張する。わたしにはまったく不当と

7) E. Avinger, "Charles Darwin und Karl Marx, Eine Parallele", in: *Die Neue Zeit*, 15-2.

おもわれるこの主張を詳細に取り扱うことは、いまのところできない。けれどもわたしは、この論争問題をダーウィン主義とマルクス主義にかんする特別な労作の中で、論じるつもりである。しかし、ダーウィンの著作についての25年にわたる研究と社会主義理論との多年の取組にもとづいて、わたしに今日ひとつの所見を披露することを許してほしい。つまりわたしは、ダーウィン主義と社会主義との間に、まったくなんの矛盾もないと考えているのである。わたしには社会主義は歴史的発展過程の論理的帰結であるとおもわれるし、ダーウィンの学説は社会主義の最強の科学的支柱だとみなしている。」(S. 752-753)と。

とうじダーウィン主義の多くの支持者たちは、ダーウィン主義と社会主義とは対立しているとみなしていた。社会主義は、ダーウィン主義の基本的観念である生存競争と自然淘汰に反する見解だとみられていた。ところがアーヴェリリンクは、ダーウィン主義と社会主義の一つであるマルクス主義とは矛盾しない。それどころか、前者は後者を科学的に基礎づけているとみている。こうした見解はドイツ社会民主主義の理論家たちにも影響した。おおくのダーウィン主義者が、ダーウィン主義とマルクス主義とを対立するものとみたのにたいして、ドイツ社会民主主義のおおくの理論家たちは、アーヴェリリンク同様に、両者を矛盾しないもの、あるいは互いにあい補うものとみたのである。このことは、社会民主主義者たちが、とうじの流行思想たるダーウィン主義をマルクス主義の普及のために利用しようとしたと、皮肉に捉えることもできるが、とうじにかねらの解釈したマルクス主義がダーウィン主義と共通点を持っていたことをも推測させるものである。

アーヴェリリンクのダーウィン主義にたいする評価は、マルクスの身近にいた人物の見解として、またマルクス主義とダーウィン主義との関係についてのかなり早い時期の考察として、注目される。前記のエンゲルスのマルクスの葬送の辞のなかでの発言も、アーヴェリリンクのような人々の評価と共鳴するものだったといえる。そこには、マルクス主義をダーウィン主義どうように、一つの

科学ととらえる姿勢がみられる。そしてドイツ社会民主主義の理論家たちに影響を及ぼしたのも、そうした評価だった。

IV ドイツ社会民主主義の理論家たちの社会ダーウィン主義に たいする評価

社会主義と社会ダーウィン主義との関係においては、まずおおくの社会ダーウィン主義者がダーウィン進化論にもとづき社会主義を批判した。これにたいして社会主義者のがわからずは、社会主義とダーウィン主義とを結合しようとする見解と、両者は矛盾しないとみるにせよ両思想の相違を強調する見解とがあらわれた。

(1) ダーウィン主義による社会主義批判

ダーウィンの進化論は、生物界における種の進化を個体の競争による最適者の生存（自然淘汰）から説明する理論であったが、かれはそれをマルサスの人口論にかんする書物を読んだことから思いついた。そのかぎりでは、ダーウィン進化論にはもともと社会理論と結びつく地盤があった。ダーウィン進化論を社会に適用したひとびとは、それを社会主義を批判するために利用しようとした。かれらは社会主義が個人の間の、あるいは集団の間の生存競争を否定することによって、社会進化のもっとも重要な動因を否定していると非難した。たとえば、社会問題が深刻になってきた19世紀後半のイギリスにおいて、ハーバート・スペンサーのように自由放任の資本主義を擁護しようとした人々は、この体制が進化の法則と合致しており、「競争を取り除いたり軽減させることですら自然に反する行為となりうる」と論じ、こうした見地から労働組合や社会主義思想あるいは政府の干渉などに反対した⁸⁾。

またドイツにおいても、「社会ダーウィン主義は……支配階級の正当化のイデオロギーという本質をもっている。正当にも、ドイツにおけるダーウィン主

8) Th. A. ダージ他著／渡辺政隆他訳『進化思想のトポグラフィ』平凡社、1987年、37頁。

義の偉大な宣伝家であるエルンスト・ヘッケルは、すでに1878年に、ダーウィニズムは『およそ社会主義的ではない』という立場に立っていた⁹⁾。ヘッケルは社会ダーウィニズムが、社会主義的なものではなく、「貴族主義」的なものだとして述べた。このようにイギリスでもドイツでも、ダーウィニズム進化論が社会に普及してゆくなかで、ダーウィニズムを利用した社会主義批判がなされるようになった。

これにたいして社会主義者のがわから、積極的に社会主義とダーウィニズムとを結びつけようとする見解が生じてくる。たとえばベルンシュタインやカール・ピアソンの見解はその例である。かれらは19世紀後葉の流行思想としてのダーウィニズム進化論を、積極的に社会主義思想のなかに取り入れて、進化論的な社会主義思想をかたちづかったのであった。

(2) 社会主義とダーウィニズムとの結合——ベルンシュタインとピアソンの場合——

ピーター・ゲイは、マルクスとベルンシュタインとの思想的継承関係について、こうのべている。「進化論への関心はマルクスの著作全体を通じて明瞭に表れており、マルクスが当初『資本論』をダーウィニズムに捧げたいと考えたのも決して偶然ではない。このようなマルクス主義の進化論的側面はエドゥアルト・ベルンシュタインにとっても永遠の重要性を持つものであった。ベルンシュタインの『発展 (evolution)』ということばは、マルクス、エンゲルスが使用した意味とむしろ異なっていたことは事実であるが、明らかに、マルクス、エンゲルスの資本主義発展論の研究に由来するものである。この概念こそは、かれがマルクス、エンゲルスから受けついで最大の思想的遺産であった」¹⁰⁾と。

9) H. U. Wehler, "Sozialdarwinismus im expandierenden Industriestaat", in: *Krisenherd des Kaiserreichs 1871-1918*.—Göttingen; Vandenhoeck & Ruprecht (1970), S. 288.

10) Peter Gay, *The Dilemma of Democratic Socialism—Eduard Bernstein's Challenge to Marx*, Collier Books, New York, 1962, p. 87. 長尾克子訳『ベルンシュタイン——民主社会主義のディレンマ——』木鐸社、1980年、104頁。

だが最近の研究によれば、マルクスが『資本論』をダーウィンに捧げようとした事実はなかった¹¹⁾。このことからみても、マルクス自身の思想がまったくダーウィン主義的な意味で進化論的であったとはいえない。ベルンシュタインの進化主義はむしろフェビアン主義をへてダーウィン主義に由来するのである。

ではベルンシュタインは、ダーウィン主義をどう評価していたのか。論文「社会主義の擁護者であるダーウィンの弟子」¹²⁾のなかで、かれは宗教と国家に敵対したダーウィンの弟子たちが社会主義と闘わねばならないと宣言しているのにたいして、社会主義者はダーウィン主義の進化論を生物界の自然法則としては認めても、人間社会へのダーウィン主義の直接の適用には反対していると述べている。ところでベルンシュタインがこの論文で取り扱った社会主義の擁護者であるダーウィン主義者とは、スペンサーの弟子のグラント・アレンであった。

ベルンシュタインによると、アレンはロンドンの『フェビアン協会』の集会において、『社会主義は自然淘汰の法則に介入するかぎりでは、科学と矛盾しているのか』というテーマで講演をおこなった。アレンがそこで証明しようとしたのは社会主義とダーウィン主義とが矛盾しないということであり、かれの言葉をかりれば、「社会主義は、……人間社会の形成にたいする進化論的發展法則の作用の、最後のまさしく必然的な成果として、生物界の現象の歴史において、正当な位置を得ている」(S. 172)ということである。かれの見解では、「資本主義と土地独占の制度」は自然淘汰の作用を制限し妨害するが、社会主義はその制度を廃止することによって、自然淘汰の作用を発揮させるからである。全動植物界の進歩は自然淘汰によってなされるが、社会主義社会でも自然

11) 1931年以来、マルクスが『資本論』の一部にダーウィンへの献辞を書くことを望み、ダーウィンがそれを断ったという伝説が流布し、その論拠として1890年10月13日づけのダーウィンのマルクス宛書簡が挙げられてきた。しかし、この書簡はマルクス宛ではなく、アーヴェリング宛であることが判明した。Ralph Colp, JR., *op. cit.*, p. 481. 松永俊男『ダーウィンをめぐる人々』朝日新聞社, 1987, 205頁をみよ。

12) Eduard Bernstein, "Ein Schüler Darwin's als Vertheidiger des Sozialismus", in; *Die Neue Zeit*, 9-1.

淘汰が働くことによって進歩がなされるというのである。

アレンは結論としてこう述べている。「進歩した段階にある社会が、その成員のひとりひとりや階級の、人為的な優遇ないし冷遇を除去すればするほど、その社会がかれらの若者の健康、能力、教育を配慮すればするほど、またその社会がだれも欠陥になやまず、だれも過重労働を強いられないように、さらにだれも不利なチャンスを与えられず、だれも必要な労働手段と道具を与えられないことのないように、配慮されればされるほど、個人はそれだけ成功するだろう、という結論を引き出すことができる。……というのは、社会主義はあらゆるグループにおいて、個々人のうち最も能力があり力のあるものを引き上げるように努力し、諸グループの間になお見出される自然淘汰は、一グループの長所と他グループの欠点をじゅうぶん明瞭に指示し、より高いより良い典型の範にしたがって、自発的に自己を完成しようとするからである。」(S. 176-7)。

ベルンシュタインは、このアレンの見解を批判していない。このことはベルンシュタインにとって、この見解が同意できる内容のものであったことを意味しているだろう。かれがダーウィンの進化論を社会主義の思想と結びつけることができることみなしたのは、進化論にふくまれている自然淘汰による進化という思想が社会主義社会について妥当しうるとみたことにあった。人間社会の発展を説明するために、ダーウィニ主義とマルクス主義とを結びつけてゆこうとする観点が、ベルンシュタインにはみられるのである。

こうした観点は、ベルンシュタインの主著『社会主義の諸前提と社会民主主義の課題』(1898)にもみられ、かれは自分の修正主義の立場を「有機的進化主義 (Organischer Evolutionismus)」と特徴づけている。かれは社会主義が資本主義の否定的な現象をとまなう発展のすえの崩壊の結果として生じるとはみなかった。むしろ資本主義の発展にとまなう、社会的富の増大や科学の発展や「労働者階級自身の知的および道德的成熟の増大」によって、社会主義は漸次成立するとみていた。資本主義崩壊からではなく、資本主義のなかから漸進的に社会主義が成長してくるとみていたのである。

カール・ピアソンは、論文「社会主義とダーウィン主義」¹³⁾において、とうじダーウィン主義を社会進化に適用し、ダーウィン主義と社会主義との対立を強調していた、ベンジャミン・キッドの『社会進化』(1894)を論評している。ピアソンによると、ヘッケルやスペンサーなどダーウィン主義者たちは「社会主義が自然淘汰の法則と矛盾していると信じ」ているのにたいして、社会主義の文筆家たちは「社会主義の主要目的のひとつが共同社会内部の競争の緩和」(S. 714-5)にあると信じている。こうした論争の状況のなかで、キッドの立場は、「社会内部の生存闘争が社会の進化の根本条件であるという主張を……生物学的な真理としてうけいれる」(S. 715)ことにあった。他方、ピアソンの立場は「ある社会内部の闘争の制限は、社会的熟練の増大をもたらすだろう」(S. 718)とするものであった。キッドは社会内部の生存闘争を進歩の条件として肯定し、ピアソンはそれの制限と外部の社会との闘争を強調する。

ピアソンが同論文の続篇で論じているのも、共同社会内の諸個人の競争による自然淘汰をどう評価するのかという問題である。かれの見解では、スペンサーは、諸個人の競争による自然淘汰を社会進化の重要な要因だとみているが、ダーウィン自身は生物界と人間社会は異なり後者においては事態はもっと複雑だとみていた。では社会主義者の見解はどうか。ピアソンによれば、「社会主義者は文明社会では、内部の生存闘争が重要な役割を演ずるという証拠は、提出できないという意見である。」(S. 755)。社会主義者は内部的競争とはべつの自然淘汰の要因によって文明国民の発展がなされるとみる。けっきょく、ピアソンは「ここで問題になっている自然淘汰の要因たる内部の闘争が、一般的にいて、文明国民においてわずかの役割しか果たさないことを、証明しようとした」(S. 756)のであった。ピアソンは、集団内の諸個人の生存競争よりも、集団と集団とのあいだの闘争を重視したのである。

ところでドイツの社会主義者により好意をもってむかえられ、『ノイエ・ツァイト』誌上にその論文が掲載されたこのピアソンについて、センメルはかれ

13) Karl Pearson, "Sozialismus und Darwinismus", in: *Die Neue Zeit*, 16-1, S. 708, 752.

が社会主義とダーウィン主義とを結びつけて、集団外的社会進化論にたちつつ「社会帝国主義にイデオロギー的基礎を提供した」¹⁴⁾と評価している。というのもセンメルによると、ピアソンはイギリスが世界的地位を維持するためには、必要とあらば、他の劣等民族を犠牲にしてでも、自国民の福利をはかるべきだと主張したからである。また、社会主義と進化論との結びつきについては、一民族の内部での生存競争によって民族内部の対立が克服され、民族の集団的な結合が強化されることが、世界的規模での競争においてこの民族が勝利する条件であるというかたちで捉えていたからである。ピアソンは進化論と社会主義とをむすびつけ、進化論により社会主義を基礎づけたが、その結果、かれの思想は社会帝国主義という性格をもつにいたった。このことは、ピアソンをたかく評価したドイツの社会主義者によっても、じゅうぶんには捉えられなかった。だがすでにボーア戦争中の1900年に、ピアソンがそうした思想の一端を吐露していることをみれば、ドイツの社会主義者たちは、進化論と社会主義との結合が、社会帝国主義をもたらしうという危険性にきづくべきであった。

(3) 社会主義とダーウィン主義とを区別する見解——ペーベルとカウツキ—の場合——

ペーベルは、論文「ダーウィン理論と社会主義」¹⁵⁾のなかで、とうじ流布していたヴォルトマンの『ダーウィン理論と社会主義——人間社会の自然史に関する一論』（デュッセルドルフ、1899）を紹介しつつ、ダーウィン主義に関する自己の見解を述べている。ペーベルによれば、ダーウィン主義者のなかでヴォルトマンは、ダーウィン主義と社会主義とが矛盾していないとみなすかずくなく理論家の一人であった。「かれ（ヴォルトマン）の達した最終の結論は、ダーウィン主義と社会主義とは互いに矛盾しておらず、生存闘争における最優秀者の選択というダーウィン主義理論は、それが人類にとって問題になるかぎ

14) センメルのピアソン評価については『社会帝国主義』みすず書房、25、35-36頁をみよ。

15) August Bebel, "Die Darwinische Theorie und der Sozialismus", in: *Die Neue Zeit*, 17-1. S. 484-9.

り、社会主義社会において人間と自然との統一が樹立されるという点に、表現される」(S. 484-485)ということだった。この論文のなかで、パーベールはダーウィン主義と社会主義とを結びつけようとするヴォルトマンの努力に、がいして共感しているが、しかしダーウィン主義者が「社会問題の無知と軽視という点で、……かれらの師匠の模範にしたがった」(S. 485)こと、社会主義が進化論と密接な関係をもっていることは社会主義者よりもダーウィン主義者によって理解されていないこと(S. 486)、ダーウィン主義者も科学的社会主義とその基礎にある史的唯物論を知らない場合には人間社会の発展法則を理解できないこと(S. 486-7)などを指摘し、マルクス主義者がダーウィン主義を理解していないのではなく、むしろダーウィン主義者がマルクス主義を理解していないのだと主張したのである。

したがって、パーベール自身はダーウィン主義から積極的に学ぶものがあるとは見ていないのであり、ただ生物界の発展にかんする科学的知見としてそれを尊重し、それが社会主義を否定するものでないことを明らかにすれば、それで充分だった。ダーウィン主義がマルクス主義解釈にどのような影響を及ぼしうるのかといった問題には、関心がなかったのである。

カウツキーは、論文「ダーウィン主義とマルクス主義」¹⁶⁾において、イタリアのフェリー教授の著書『社会主義と現代科学』(ローマ、1894)を批評しつつ、ダーウィン主義とマルクス主義との関係について論じている。かれはまずマルクス主義とダーウィン主義との類似性について、「ダーウィンとマルクスとの対比は新しいことではない。両説の類似性は明白である。一方は他方とどのように、発展の鍵を闘争のなかに見出した。つまりダーウィンは生存闘争のなかで、マルクスは階級闘争のなかで発見した」(S. 709)と述べている。しかし、マルクス主義がダーウィン主義にもとづいているというフェリーの主張にたいしては、反対している。フェリーは「『ダーウィン主義は社会主義と対立するものではなく、むしろそれは社会主義のもっとも基礎的な科学的土台をな

16) Karl Kautsky, "Darwinismus und Marxismus", in: *Die Neue Zeit*, 13-1, S. 709.

すのであり、社会主義は……ダーウィニズムの論理的および必然的な帰結をなすことを、強調したい』(S. 48)」と述べたが、カウツキーはマルクス主義がダーウィニズムによって基礎づけられていることを否定した。というのも、時間的継起からして、マルクス主義がダーウィニズム以前にすでに成立していたからである。

またカウツキーは、進化法則という自然法則にもとづいて社会主義の必然性を根拠づけるとするフェリーの考えにも反対し、それぞれの社会形態はそれぞれの歴史的条件によって存立しているのであり、社会主義社会の必然性も、自然法則にもとづいてではなく歴史的条件にもとづいて証明すべきだとみた。したがってベーベルとカウツキーの場合には、ダーウィニズムは生物界の進化法則を解明し、マルクス主義は人類社会の発展法則を解明したというように、両者を区別して捉えていたといえよう。しかしこの際注目すべきなのは、かれらが両者を区別しつつも両者が対立しているとはみななかったことである。進化という点では共通性があるとみていたのである。

V ま と め

これまでみてきたように社会主義とダーウィニズムとの関係にかんして、ダーウィンの進化論によって社会主義は理論的に否定されるとみる立場と、ダーウィン進化論によって社会主義は理論的に基礎づけられるとみて両者を結合しようとする立場と、ダーウィニズムは生物界の進化を明らかにし、マルクス主義(社会主義)は人間社会の歴史的発展を明らかにすると両者を区別する立場の、三つがあった。第一の立場は資本主義体制擁護の保守主義や人種差別・少数民族抑圧の人種主義・民族主義と結びつく。第二の立場からはベルンシュタインにみられるような進化論的社会主義が生じるが、これはしばしば自国社会内の競争を制限することによって外国および他民族との競争を助長する社会帝国主義に陥る。第三の立場からは、進化と革命とを統合した理論が生み出される可能性はあったが、現実にはそれはカウツキー理論にみられるような資本主

義崩壊＝社会革命論というそれ自体進化論的で客観主義的なものとどまったのである。

社会主義とダーウィン主義とを結合しようとする流れも、両者を区別しようとする流れも、ともに社会ダーウィン主義からの社会主義攻撃にたいする反応だった。しかし、ともに社会ダーウィン主義が帝国主義のイデオロギー的支柱となっていることにたいする明確な認識が欠けていた。ドイツ社会民主主義が帝国主義にたいしても、またのちにはナチズムにたいしても、じゅうぶんには対抗できなかった原因のひとつは、かれらの社会ダーウィン主義の危険性にたいするこうした認識の欠如にあった¹⁷⁾。また、ダーウィン主義と社会主義との関係にかんする二つの見解は、ともに社会の進化の法則を信じる点では共通していた。だがそのように社会法則を実体化し、漸進的にせよ、資本主義崩壊を経てにせよ、バラ色の将来社会の実現を予想する楽観主義的な進歩信仰に、第二インターの社会主義者の限界があった。

ところで、アメリカの制度学派にみられる、改良主義と結びついた社会ダーウィン主義の流れの意義については、ここでは論じられなかった。また現代的な社会理論の構築という観点からいっても、漸進的な社会進化と急激な社会革命とをともに含むような社会理論の構築のためには、社会ダーウィン主義の有機体的な社会進化論とマルクス主義的な社会革命論とのつきあわせが必要であるが、そうした作業ものこされた課題である¹⁸⁾。

17) だが、社会ダーウィン主義の流布がもたらした悪影響は、過去のはなしではなく、現代にも通じる問題である。先進工業国における外国人労働者にたいする差別意識の問題、社会情勢の中心に階級闘争よりは諸個人間の競争がおしでてきていることなどをみよ。

18) この点では、W. F. ウェルトヘイム『進化と革命』紀伊国屋書店、1982、をみよ。